

図画工作科

小 西 裕 一
邑 井 吉 治

1 図画工作科の本質について

私たちは図画工作科の本質を次のように考えている。

ものごととの造形的なかかわりを通して 自分の想いを表す喜びを味わい
人間らしい心と創造性を培うこと

(1) ものごととの造形的なかかわりを通して について

「ものごととの造形的なかかわり」とは、表現と鑑賞の二つが絡み合った造形的な創造活動である。表現は、対象（全感覚でとらえられるもの）に接し、想いが触発されたとき、その想いをもとに材料や用具を扱いながらつくっていく活動である。鑑賞は、対象（視覚でとらえられるもの）に接し情感や造形的なよさ美しさを味わう活動である。鑑賞は表すことではないが、表現の見方、考え方を広げ、機能的に働くものである。

(2) 自分の想いを表す喜びを味わい について

「自分の想いを表す喜び」とは、一つは想いにしたがって自分ならではの表現を進め、想いに合致するようなものを実現する喜びである。夢中になってつくる時には、考えたりつくったりする活動が自然に活性化し、自分に備わっている思考力や感覚や技能などが駆使される。これらの能力は、体験を重ねていく中で身についたり鍛えられたりして高められていくのである。

もう一つは表現が想いの発信となったり、自分の生活に役立ったりする喜びである。この喜びを味わうことで、自ら表現することの意義を自覚できると考えられる。

(3) 人間らしい心と創造性を培う について

「人間らしい心」とは、自分の身のまわりにある造形的なよさ美しさに気づいたり、感動したりする感度のよい心のことである。また、造形的なよさ美しさを生活に生かしたり、鑑賞や造形活動によって生活を楽しく便利にすることのよさがわかる豊かな心のことでもある。

「創造性」とは、欲しいものや表したいことを、買い求めたり、他者にしてもらったりするのではなく、自分で考えてつくり出せることである。

図画工作科ではこれら二つのことが(1)(2)によって子どもに培われていくことを目指している。

2 本質にもとづく基礎・基本について

本質にもとづき図画工作科で大切にしたい基礎・基本を考えてみる。

いくら豊かな想いを持っても、いくら想いを練り上げて念入りな計画を立てても、材料や用具を適切に扱えなければ、つくり方が雑然となり、納得できる作品になる可能性は低くなる。これではつくる喜びは得られないであろう。反対に、物を扱う能力がいかに高くても、発想したり考えたりすることが不十分であれば、表現の味わいが浅くなり、やはり納得できる作品になる可能性は低くなる。私たちは、子どもが自ら納得できる作品になる可能性は、この二つが解決されるところにあると考えるとともに、このことこそ、表現する際に欠かせない基礎・基本であると考えた。

以上のことから、培いたい基礎・基本とは、一つは外向的な「つくる力」であり、それは用具や材料を想いに合わせて使える創造的な技能である。もう一つは内的な「感じたり考えたりする力」であり、それはよさ美しさを感じたり想いを練ったりつくり方を考えたりすることである。これは鑑賞においても必要であると考えられる。従って基礎・基本を以下のようにとらえた。

自分の想いに合わせて材料や用具を扱えること
よさ美しさを感じたり表し方やつくり方を考えたりできること

3 自己の学びを広げ深めるについて

図画工作科において自己の学びを広げ深めていくこととは、「自分らしい表現をすること」であると考えた。つまり、子ども一人一人が自分ならではの想いをもち、その具体的な実現方法を探りながら、またさらに想いを広げながら、徐々に自分に合う表現へと向かっていくのである。一つの題材の中で、一人ひとりの感じ方や考えによって様々な表現が生まれる。このような自分の活動を生み出すために私たちはどうあるべきなのか、これまでの実践から次のように考えた。

(1) 自分らしさを生み出すために題材の楽しさを実感できる場を設定する

子どもの造形活動の動機は、つくってみたいという欲求であり、自分なら何をつくるかが見つければそれが題材における「切実で楽しみな課題」となる。そこで、題材と出会った時に子どもが自由に発想を話し合ったり、試したりできる場に時間的なゆとりをもたせ、題材の内容や楽しさが実感できるようにする。この場において、自分ならば何をどのようにつくるかを大まかなりにも見い出せるであろう。

また、基礎基本で述べたように、いくら豊かな想いをもって、材料や用具を適切に扱えなければ、納得できる作品になる可能性は低くなる。用具などの基本的な扱い方を子どもが理解できるようにするためには、子どもの目の前で教師が実際に行って見せることが必要になることもある。目や耳でとらえることにより用具を扱う際の要点が把握でき、さらに制作への自信や意欲につながっていくと考えられる。

(2) 一人ひとりの自分らしさに対応できる学習環境をつくる

子どもが想いをもとにして、自ら前もって持ち物を揃えられるようにすることは大切である。しかし、学習中に突然よいアイデアが思いつく場合があるので、それに対して用具・材料や資料などを個別に提供できる環境をつくっていく。

また、教師は、個人や全体の問題点に留意して巡視し、必要に応じて示唆したりして、子ども自らが解決すべき点に気づけるように配慮する。

(3) 自己鑑賞の場と相互鑑賞の場を設定する

自分の好みや考えに合った表現になってきているかをふりかえる自己鑑賞の場を適宜設けることで、表現を吟味し今後の方針を立てられるようにする。また、友だちとの相互鑑賞の場を適宜設けることで、友だちの作品から自分では思いつかなかった材料の使い方や表現方法に気づき、表現の視野を広げられるようにする。このような表現途中での鑑賞は、より納得できる表現への足がかりとなり、次の段階への意欲につながるであろう。

(4) 一人ひとりの自分らしさを楽しむ場を設定する

自分の表現を他にアピールしたり、様々な個性を味わったりする活動によって、自分らしく表現するよさを感じられると考えた。「自分の表現を他にアピールする」活動とは、作品の説明カードを作成するなど、内容や工夫や努力点を伝えるものである。この時のふりかえりによって、自分がした表現の再認識や表現活動への満足感、或いは作品への愛着を増すことにつながるであろう。また、社会における造形活動に見られるように、作品は他者に対する発信やメッセージとしての使命もあり、他者への発表は作品の用途を果たすことにもなる。

「様々な個性を味わう」活動とは、一人一人の個別的な想いや表現方法のバリエーションを楽しむことであり、様々な価値観を互いに共有し、他にはない自分らしい作品にすることへのよさを感じられるであろう。

これら二つのことによって、表現活動の成就感や自分らしい表現が生まれるよさを感じられるようになると考える。